

私

Monthly
Shijyukukai
No.368

塾

www.shijyukukai.jp

界

12

DECEMBER
2011



デジタル教育こそ“人”の活用を

モンゴルを五泊六日で旅してきた。観光ではなく北東アジアの物流を研究している日本の団体と、モンゴルのオルホン大学の共催で開かれた「異文化受容シンポジウム」の発表者の一人になったため、僕は「日本の児童文学と読み聞かせ」というタイトルで発表を行った。

同時通訳者の訳が的確だったのか、固っ苦しい話を避けた内容にしたのがよかったのか、会場から笑いも起こり、こちらの意図したものが伝わったようではあった。

会場のモンゴル外務省は終戦直後に抑留された日本人捕虜によってつくられた建物だと知った。ウランバートル市内には、ほかにいくつか日本人捕虜がくつった大きな建物があるという。僕の二五歳年長の兄は中国東北部、旧満州の北部で二〇歳で戦死した。戦死せずに捕虜になり、ここで建設に従事したあと、無事、

カゲキに行こう!

直木賞作家 志茂田 景樹

144 モンゴルの子供たちの日本力に脱帽!



帰国でき

たら父と母はどんなに喜んだろうか、と玄関ホールの高い天井を見上げながらしばし感慨に耽った。その父も鬼籍に入つて久しい。

もっとも、ここでの捕虜としての労働は酷寒にさらされての過酷な労働で、多くの捕虜が帰国の夢叶わずに命を落としていた。戦争していいことは何もないのだと改めて思った。

ウランバートルは朝から夜まで車の渋滞が続いた。何度も来ている人の言では、来るたびに渋滞が深刻なものになっているという。

中国や、東南アジアの都市では朝夕、自転車の洪水が見られるが、ウランバートル市内では自転車は車の陰で走っているような状態で、いたつて数が少ない。

そうか、この国は遊牧国

家で馬から自転車を飛び越え、いきなりモーターゼーションに突入したのだと思いいたり、大いに納得した。せっかくモンゴルに来たのに、モンゴルの子どもたちには読み聞かせをしない手はない、と主催者にその意を通じてあったので、市内のナラン小学校で読み聞かせを行うことになった。

モンゴルの小学校は二年制のところが多い。日本で言えば小、中学校と高校二年次までの一貫校ということになる。

ナラン小学校側は四年生と五年生だけを集めてくれた。日本語教育を行っているところだとは聞いていたが、読み聞かせを始めて先生方が誰も通訳をしないことにいささかたじろいだ。

自作の童話『ちいさなち

いさなぞうのひみつ』を語りでやったが、この童話は日本では小学生以上に主にやっている。

理解できるだろうか、と心配になったが、それはすぐに杞憂だと解った。場面面で表情が豊かに変化する。つまり、しつかり物語の世界に入り込んできたのである。終了後の質問では日本語で、

「どうしていろいろな色に頭を染めているのですか?」

と訊かれた。

いや、後生畏るべし、のモンゴルの子どもたちであつた。

■ 志茂田 景樹 (しもだかげき) ■

1940年静岡県伊豆生まれ。中央大学法学部卒業後、様々な職に就く。1976年『やっとな探偵』で第27回小説現代新人賞受賞。1980年『黄色い牙』で第83回直木賞受賞。「サカキバラ症候群の子どもたち」「心療内科」等の心を問う著作のほか、「おれたち不登校。個性と心で生きてやる。」「親と子の価値観戦争」等、現代の教育を問う著作も多い。